

精神医学基礎講座

両価性

人 見 一 彦

近畿大学臨床心理センター

I. 両価性概念の原典

両価性（アンビバレンス ambivalence）の原典は、E.Bleuler の 1914 年の同表題の論文（人見 1997）に由来する。その内容の一部を詳しく紹介すると、「精神病に罹患しているある母親が自分の子どもを毒殺した。ところが後に、彼女は自らが行った行為に絶望する。苦悶しつつ悲嘆し、泣きはらしながらも、同時に口元は明らかに笑みを浮かべている。患者はこうしたことを意識しているわけではない」「ところで健康者は意識的な熟慮によるにせよ本能によるにせよ、利益と不利益とを相対的に天秤にかけて、自らの主観的な評価に応じて、不快が最小に快が最大になるように行動する。しかし、患者のスプリットした精神は有利なものも不利なものも評価しようとする結果、二つの評価系列を統一的な均衡へともたすことが徐々にできなくなる」。これが両価性であると定義した。

この母親については、「彼女は子どもを過失によって殺したわけではなく、長い争いの果てに殺害してしまった。彼女は夫を愛していなかったため、この夫との間に生まれた男児の存在は彼女にとっての恐怖であった。それゆえに彼女は子どもを殺害したのであり、殺害したあとで微笑を浮かべていたのである。しかし、殺された男児は、彼女自身が愛していた自らの子どもであったために、子どもの死に涙するのである」。

E.Bleuler は論文の最後に、「差し当たり踏まえておかねばならないことは、日常的で自明な両価性が存在すること、すなわち同一の対象への関係において快であると認識したり不快であると認識したりはするが、その両者ともに、多かれ少なかれ統一的な価値づけへと結びつくような両価性が存在するとともに、二つの価値づけが並列して存続することによって特徴づけられるような別の両価性も存在することである。後者については正常者においても多少は現れるが、これが重大な事態に関係してくると生活上の困難を意味するようになり、しばしば直接に神経症へと導かれることになる。さらにその表現を夢や詩作や神話における自閉的思考のなかに、さらには宗教的表象と儀式的なかにも見出すことができる。しかしながら、われわれがそれにもっとも顕著に遭遇するのは統合失調症においてである」と述べている。

II. 両価性の精神病理

両価性は感情、意思、認知のさまざまな側面で見られる。E.Bleuler は感情的両価性、知的両価性、嗜好および願望の領域における「両立傾向」(ambitendency) を分類したが、Chr. Scharfetter (2010) はそれを引き継いで、以下のように定義し分類している。

1. 定義

両価性とは、イエスとノーが同時に存在すること、さまざまな肯定的な感情と否定的な感情、気分、切望、態度、「見解」が並列して存在することを意味する。

2. 分類

〔感情的両価性〕とは、同一人物、対象、表象あるいは体験内容に対立する互に矛盾した感情の並列。具体的には、同一人物に対する愛と憎しみが相互に解消されることなく、同時に並列して存在する。

〔志向的両価性あるいは両立傾向〕とは、得ようとする努力とそれに対する抵抗が並存すること。具体的には、ある患者は食事をしようとすると同時に食べようとはしない。そのため患者は昏迷様状態になり硬直する。口に運ばれるスプーンが途中で止まってしまう。

〔知的両価性〕とは、事実とそれの反対ものとの併存。具体的には、ある患者は考える。私は彼女のように人間であるが、私は彼女のように人間ではない(安定した自我-同一性の喪失)。

3. 出現

これは正常心理学の領域においても一般的なものである。健常者では態度、見解、行動への熟慮と決心により部分的に克服される。宗教-心理学的領域では両価性は偏在的である。精霊、神々、神は愛されると同時に恐れられる。先祖霊、トーテムに対して、同時に畏怖と尊敬が存在する。

両価性は疑惑、決断困難において、うつ病者または強迫症患者の困惑において、時にはうつ-躁混合状態においても広く見られる。重度の両価性は統合失調症者に見られる。ここでは深く引き裂かれること、不統一性、スプリット、不適応性、さらにはさまざまな感情の移入不能が存在する。

両価性は偶然に極端なやり方で克服されることがある。酩酊、恍惚、パニック、躁的「疲れすぎ」、離人症に至る感情遮断(解離)において。

III. 両価性への精神療法

Benedetti (1964) は両価性とその解釈について、次のように述べている。

「両価性は単なる精神内界の事態であるばかりではなく、しばしば対人的状況でもあるように見える。患者の両価性は周囲が同じような両価的態度を取ることによって生じる。例えば、独立していないことやリードしてほしいという患者の欲求について、内心では腹を立て

ているようにみえて、周囲はそのように応じる。多くの社会的関連を考えることなく、病気に隠されているもののなかに鏡像のように存在している健常者の態度について考えることなく、精神病理的なものを患者の属性としてのみ考えることは避けねばならない。そこから引き出される治療上の認識とは、患者自身への両価性の指摘は、患者の「不条理」を指摘するものと聞きとられる可能性があるということである」。

「そこから両価性の問題よりもさらに広範な精神療法についての問題がはじまる。われわれは常に精神療法についての二者択一の問題の前に立っている。つまり患者自身にその矛盾、対立、防衛態度、抵抗、引き裂かれていることを指摘することによって、患者を縛りつけ行き詰らせている状況から、本来的な存在へと向かってみずから闊歩することができるように決断をうながせるようになるのか、あるいは決断できない患者に対しては、こちらが内面的、外面的パートナーとしての顔を提示することによって、決断する自由を患者にゆだねるかのいずれかである。患者の不適切な態度を指摘することは、患者が存在している水準に応じて、洞察に火をつけることもあれば、反対に、患者が行うすべてのことは不適切なものであるという検閲を強めることにもなる」「われわれは自己矛盾を指摘するのではなく、二つの傾向についての権利と必然性について認識していることを表明することによって、患者にそれを前進させるようにする。スプリットした側面に自分自身がいることを見出すことにより、それを乗り越えて大きく成長することができるであろう」。

Benedetti (1983) によれば、両価性は決して人格性を拭い去るものではなく、自我の柔軟性と潜在的な代償可能性は保持されているのだ。そこで精神病性の若い男性患者を取り上げる。

患者は子ども時代を、母親の支配的で所有的であると同時に、遠ざけようとする矛盾した影響のもとに過ごした。そして長い共生的融合の末に、ある傾向が現れてきた。気に入った人のそばにいと占有されて、不安から解放されるように感じるが、その一方ではその人を自分に服従させ、自分のものにしたいという欲求である。さらに自分の率直さが注目されて都合よく扱われているのではないかという感情が生まれてきたために、友だちにもこころを打ち明けられなくなった。自分が無防備に相手の手の内にあり、武装解除されてしまって駄目になったように感じた。その一方、自分が何者でもない存在のようにも感じる。患者の現存と自発性を服従させようとするものはいないのに、「空虚な空間に浮かぶ身体」のように、「天国と地上の間に吊り下げる」という幻聴に襲われるようになった。患者は自分を占有しようとする母親との相互作用に巻き込まれて、「あちら－こちらへと－投げられる存在」となり、患者自身の自律性は著しく制限されることになる。他者がその場に存在している、いないにかかわらず、自律性が脅かされていた。

そこで Benedetti はこのように対立する「限界状況」を、治療者という目立たない存在を通じて、患者との間で共通に展開する幻想を通じて、心的運動を自由に増大させようと試み

る。患者は分析的関係の複製でもある一種の双子幻想を発展させる。「意のままに扱おうとする」と「意のままにされてしまうような」人間を思い浮かべる。次いで「修道士の孤独」と記されるような生活状況を幻想した。このような幻想を受け入れることについては、ある種の「両価的感情」が残っている。人間的な近さが増大するにつれて、同時に相手によって独占され、無にされるのではないかという不安も高まるが、「限界状況」のなかで、より自由にみずからの幻想を成り行きに任せる能力があると感じることにより、「さまざまな対立した傾向を支配しているのが、わたしである」ということを自分に繰り返しながら生きられるようになる。このように対立する幻想であっても対話的次元を有している。これは患者自身による実存への最初の投企であり、治療者によって下書きをされ、分析的解釈によって呼び起こされるものよりもはるかに大きな効果を示した。重要なことは、精神病理学現象を明白にして両価性の覆いを取ることでない。それを克服するための建設的な提案を患者にすることである。

ここで取り上げたような両価性と統合失調症性の両価性との間には質的な違いがあり、統合失調症では心的活動性を統合する働きそのものが失われており、両価性は際限のない空虚さを引き起こすことになる。両価性からの逃げ道はなく、幻覚的感觉により強力に圧迫されているために、精神療法はより困難なものになる。

文 献

人見一彦監訳 (1997) : 精神分裂病の概念 学樹書院

Scharfetter Chr (2010) : Allgemeine Psychopathologie. Thieme, Stuttgart

Benedetti G (1964) : Klinische Psychotherapie. Hans Huber, Bern

Benedetti G (1983) : Todeslandschaften der Seele. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen